希
のぞみ

希　10

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18580018

ヒュンマ, アポマリ

ダイ大　ヒュンマ小説です。
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ、アポマリ（増えてます）前提でお話が進んでいます。
ちょっと大人向けの話題や匂わせがあるので、わからない方は大人の方に聞いたりしないで、こっそりと調べましょう。（こら）
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点

Table of Contents

希　10

◇

「そろそろ、出発するか」
　ヒュンケルの声に顔を上げる。
「ええ」
「次、会えるのはネイル村かな。オレ、おばさんたちに挨拶したいし、アップルパイも食べたい！！」
「わかったわ、たくさん用意して待ってるわね」
　ダイの言葉にマァムが小指を差し出す。
　ゆびきりげんまん。
　ダイは人間の村の文化にあまり触れずに育ったため、こういう仕草が嬉しくて仕方がないらしい。
　ヒュンケルも実はそうで、ポップやレオナが冗談で嘘を教えるのを素直に信じては混乱しているときがある。今度からは、その嘘は私が訂正するつもり。
「シナモンはたっぷり？　それともない方がいい？」
「「シナモン？」」
　ヒュンケルも、ついという感じで声を上げる。
「スパイスのひとつだよ、オレはかけるとすっげー上手いって思うけど、苦手な人もいる味だな」
「あたしはシナモンたっぷりのアップルパイが好きよ。でもダイ君は苦手かもしれない」
　ポップと、いつの間にか傍に来たレオナはアップルパイにシナモンいっぱい派らしい。
「へー」
「食べ比べてみればいい。オレも一緒に食べてみたい」
　ダイに微笑んでから、ヒュンケルが見つめてくる。用意するの手伝うから、両方食べてみたいと、視線が言っている。
「ええ、いろいろ用意するわ。シナモンなしもありも、カスタードクリームが入っているものも、さつまいもと一緒のも。楽しみにし

ていてね」
「うん！」
「じゃあ、ダイ、ポップ、レオナ。またネイル村でね」
「また盗賊見つけたら、気軽にパプニカ城に帰ってきてね～」
　ひらりとレオナが手を振ってくる。
「そんなことが起きないこと、祈ってて！」
　笑って言えば、レオナが満面の笑顔で見送ってくれた。
　旅の荷物はエイミから受け取る。
　女性を匿う時に、魔法の筒に入れておいたものだ。
「……あの、マァムさん……」
　なかなか魔法の筒を離してくれないエイミを、マァムは見上げる。
「はい」
　本当に申し訳ないのだけど、私はほんのちょっぴりエイミさんが苦手だ。だから、今まであえて話などしてこなかった。エイミさんも私のことを避けていたから、まあ、いいかな……って。
　その彼女が自ら私に話し掛けてくる。
　見つめて彼女の口が開くのを待つ。
　隣のヒュンケルが間に入ろうと僅かばかり動くのに気が付いたが、目線で止める。
　その仕草に気が付いたエイミが、目を瞠り、そして微苦笑を浮かべる。
「先程の女性、マァムさんから見て戦闘経験があるように見えましたか？」
　ぱちりと瞬く。
　そして微笑む。
「ええ。女性としてはかなりのものだと思います」
「それはオレも感じた。部屋も角部屋の三階。ただの慰み役の女性ではありえない待遇だと思う」
「彼女の部屋も異臭はしたけれど、広かったしクローゼットや鏡台まであって、優遇されていたと思うわ……ただ、扱いが最低だったことは確かよ」
　言ってから、エイミも見ているから知っているか……と思う。

「ありがとうございます」
　エイミは私の手のひらに魔法の筒を置くと、意を決したかのように見つめ返してきた。
「私、謝りません……ヒュンケルと幸せになってください。そして、彼を幸せにしてあげて」
　エイミの言葉に瞬く。
　謝らない……？
　なにを？
「私、エイミさんに謝られるようなこと、ないと思います」
　首を傾げる。
　思い出しても、エイミさんに謝られるようなことをされた記憶は出てこない。
　ヒュンケルを無理にでも探して、会話をすることはできた。でも、しなかったのは私。二年間、あんまり話さなかったのは自分の選択だ。
「……っ」
　私の返事に、エイミは唇を噛み締める。
「それよりも、トベルーラっていつ覚えたんですか？　やっぱり難しいです？」
　ずっと疑問だったことを尋ねれば、エイミは目線を逸らして「二人がパプニカ城を去ってから……コツを掴みました」と答えてくれた。
「ポップはルーラを覚えてからトベルーラを覚えたって言ってましたが、トベルーラから覚えることもあるんですね」
「姉とアポロはルーラから覚えたと言っていたので、ルーラから覚えるのが普通のようです」
「へ～」
　呪文って凄い。
　私は僧侶戦士から武闘家に変わったから、今覚えている以上の魔法は覚えられないけどルーラはやっぱり憧れの魔法だ。
「自分で空を飛べるのって、素敵ですね」
　心からそう思う。
「マァムも飛べるだろう」

「岩を駆け上がって飛ぶのは、私の憧れる『飛ぶ』ではないわ」
　ヒュンケルにきっちりと言っておく。
「鳥のように、自由に空が飛べるって憧れるわ」
「……クロコダインにガルーダを借りよう」
「自分で思うように飛べるのが大事なのよ」
　つい、目の前のエイミを無視して空を飛びたい談義をしてしまった。
　慌てて彼女に目線を戻せば、エイミはなにかを諦めたような表情をしていた。
「エイミさん？」
「すみません。姫に頼んで少しだけ抜けてきたので……もう戻ります」
「あ、はい」
「ヒュンケル……誓って、なにもしないから……マァムさんと二人で話をさせて」
　エイミがヒュンケルを見上げる。
　ヒュンケルはそんなエイミを見て……そして嫌そうな表情を隠すことなく頷いた。こんな美人さんに、そこまで嫌そうな表情をしなくても……
　ヒュンケルがやや離れるのを確認をして、エイミはマァムに向き直る。
「マァムさん、ありがとう」
「……へ？」
　エイミに、こんなふうに改めてお礼を言われるようなことをした覚えはない。
「私が勝手にお礼を言いたいの。ありがとう……マァムさん」
「よくわからないけれど……どういたしまして！」
　消えてしまいそうな彼女に、笑顔で答える。
「……いってらっしゃい。お幸せに」
　やさしい笑顔に、笑顔を返す。
「はい、頑張ります！！」
　次の言葉を待つが、彼女は何も言わないので……私は「いってきます」と背を向けてヒュンケルに走り寄る。

広げられた腕の中に飛び込めば、ヒュンケルが黙って抱き締めてくれた。
嬉しくて、笑顔で右手を差し出す。
彼は帯剣をしているから利き手は繋がない方がいいだろう。
ヒュンケルが軽く頭を下げるのに気が付いて、自分も真似をする。
そこには、エイミが一人で立ち竦んでいた。
ちょっと離れたところに、アポロとマリンがいることにも気が付く。
ひらひらと手を振って、彼女に背を向ける。
ヒュンケルは気にせずに前を向いて歩いていた。
「……いいのか？」
「なにが？」
ヒュンケルの問い掛けに、マァムは首を傾げる。
「……彼女のこと、なんとも思っていないなら、それでいい」
歯に物が挟まったような物言いに、首を傾げる。
物事ははっきりと言葉にして欲しい。
エイミさんのこと……
「……やっぱり、トベルーラ、羨ましいわ」
心からの呟きに、ヒュンケルは声を上げて笑う。目の前には明るい笑顔。
「本当に、その気持ちはよくわかる」
「体術で何とか飛べないかしら？」
「どう足掻いても跳躍だがな……」
「そうよね……でも、足掻くのは大事よね」
私がそう言うと、ヒュンケルは困ったように眉根を寄せる。
「……アバンに頼ろう」
困った時のアバン先生頼り。こんなに大人になったのに、結局先生に頼ってしまう私達。
でも……
「きっと先生ならいいアイディアが浮かぶんじゃないかしら」
「そうだな……ああ、アバンにも結婚の挨拶をしなければならないな」

さらりと言われる未来に頬が熱くなる。
「他にもいっぱいの人に、報告したいわ……私は、こんなにも幸せだって」
「……私たちは、だ」
　ヒュンケルの短い訂正に、私はたまらなくなって、ヒュンケルの腕に抱きついた。力加減を誤ったことと、ヒュンケルが声を我慢したのは、ちょっとしてから気が付いた。

　＊　＊　＊

「エイミ……」
　妹の名前を呼ぶ。
　私の呼び掛けに、エイミはしばらく振り返らなかったけれど……ややしてから袖で顔を拭って振り返った。
「姉さん、アポロ、ごめんなさい。持ち場に戻るわ」
　二人への挨拶を姫が許可をした……

　姫は、つい最近までエイミを三賢者から外すことを考慮されていた。
　今は様子見。
　自分を優先し過ぎるのであれば、解雇もあり得る。
　史上初の、三賢者の剥奪。
　あまりにも不名誉だし、エイミの傷になる。
「エイミ……」
「姉さん、今夜……一緒にお酒を飲みたい。部屋に行ってもいい？」
　私はその問いに答えずにアポロを見やる。彼はやさしく頷いてくれた。
「いいわよ」

「ありがとう……私、先に行くわ」
　エイミはすぐさま走り出した。
　短いスカートをやめ、髪の毛をまとめ、化粧を薄くして、彼女は仕事に邁進していた。姫とダイ君に指摘されてから。
　姫からは一通りの状況を聞かされている。場合によっては三賢者という称号の剥奪になるということも。
　妹を庇いたい気持ちもあるし、叱咤したい気持ちもある。
　でも、人は『他人』の言葉では変わらない。
　誰が言っても……奥深くに届かなければ、意味がない。
　血が繋がっていても……体が違う時点で『他人』だ。
「しんどいだろうな……」
　アポロの独り言のような言葉に、彼を見上げる。
「意地悪をしていたのに、意地悪だと思われていない。恋敵だと思っていたのに、気にもされていない。彼に幸せをあげて欲しいと願っても、ただ彼女といることこそが彼にとっての最大の幸せ……居た堪れないな」
「……ああ」
　苦い声が漏れる。
　――――妹の恋心は叶わないだろう。
　そう感じていたのは随分前から。
　ヒュンケルは、マァムの前でだけ多弁だ。
　目が違う。
　表情が違う。
　声音が違う。
　仕草が違う。

　もう、本当にあからさまだ。

　諦めろと告げるのは簡単だが……人間というのは否定されればされるほど、頑なになってしまうもの。
　私もアポロも見守るという……『放置』を選んだ。

エイミにトベルーラが使えるようになったのは……ここから消えてしまいたいという気持ちからかもしれない。
「パプニカ城に戻ったら、厨房からエイミの好きそうな酒を買い受けよう」
「……そうね。私が好きなお酒はあの子は飲まないものね」
「オシャレなおつまみやお菓子も頼んでおこう」
「……アポロに任せるわ」

　私はそう呟くと……
　放置したツケは支払わなければならないと……覚悟を決めた。

　きっと、今頃……ヒュンケルとマァムは、トベルーラが使えるって素敵よね、羨ましいなどと……暢気に話しているような気がする。
　この想像は、きっと……合っているだろう。

おしまい

【注意書き】
このシリーズ内の「してあげる」「幸せをあげる」は『やさしい言葉』『軽い敬意のある言葉』として、使用しております。
予めご了承ください。